

在宅ケア普及 尽きぬ熱情

役人らしからぬ熱血漢だった。こうと思えば、政治家や記者など誰彼かまわず熱弁をふるった。いつの間にか「辻説法」と呼ばれ、信奉者も少なからずいた。父は神戸市の開業医、兄も医師の道を選んだが、自らは1971年、旧厚生省（現厚生労働省）に入省。33歳の時に滋賀県庁に出向した際、知的障害者福祉の先駆者・糸賀一雄の実践と教えに触れたことで、障害者福祉を生涯のテーマの一つとした。

介護保険制度創設など数々の改革に関わったが、2000年以降は医療制度改革に尽力した。医療制度は医師会と政治の壁に阻まれて長らく動かなかったが、小泉純一郎厚相時代の90年代末からようやく動き出し、その中心となった。



—勇美記念財団提供

病院での「治す医療」から、地域や在宅での「治し、支える医療」への転換である。その中核を在宅医療と位置付け、07年の退官時には在宅医療推進会議を設立し、その後は東京大にジェロントロジー（老年学）の研究組織として高齢社会総合研究機構を創設。教授として千葉県柏市のUR豊四季台団地をモデル地区に健康長寿のまちづくり、地域包括ケアづくりに取り組んだ。

地方だけでなく大都市部でも急速に高齢化が進む中、加齢に伴い弱ってきても住み慣れた地域で安心して自分らしく住み続けられる社会を築き上げる。そのためには、できるだけ元気に働き続けられる「生きがい就労」と「在宅医療を含めた在宅ケア」の二つの柱が不可欠として、いわゆる「柏モデル」を柏市やUR都市機構、医師会、専門職も巻き込んで作り上げ、その取り組みを全国に広げた。先見性のある取り組みだったに違いない。晩年までその熱情、使命感は尽きることなく、生涯現役として全国を回り続けた。

悼む

辻 哲夫さん 元厚生労働事務次官

7月30日死去・79歳